

社会学的記述としての会話分析

——社会化研究の一視角——

清 矢 良 崇

1. は じ め に

本稿は、社会学的探究としての会話分析の方法論的諸問題を、社会化研究の問題関心との関連性の視点から検討するものである。このような問題を設定する背景としては、いくつかの理由がある。第一に、会話分析の具体的なデータ収集、その解釈等の意図について、サックス (H. Sacks) を中心とする会話分析の研究者たちは、解釈的アプローチや現象学的な視点からよりは、むしろ社会学の科学化という文脈でそれを位置づけているにもかかわらず、「科学的記述」としての会話分析の側面が必ずしも十分に検討されているとは言えないと思われるからである。第二に、会話分析が、行為者の日常の言語活動の微細な側面を探究するものであるため、この研究方向が、従来の社会学的な問題関心とは異質のものと考えられがちであり、「社会学的記述」としての会話分析について、必ずしも一貫した理解がなされているわけではないという問題がある。本稿の視点から考えれば、この領域を、ミクロな社会状況を対象とした、会話プロセスの探究として位置づけるのみでは、その社会学的記述としての意味を十分に理解できないと思われるのであり、むしろ社会化研究という伝統的な社会学的関心との関連性という側面から検討することが必要だと考えられるのである。第三に、会話分析を社会学的記述として位置づけた場合、そこには、社会学に対する考え方を根底から変えてしまう視点が含まれており、それがさらに、従来の社会化研究の問題設定をも大きく変化させる可能性があると考えられるからである。そしてこの点に、社会化研究の方法論的検討として会

話分析をとりあげる本稿の意図が存在するのである。

2. 社会的行為の科学的記述

まず、会話分析の「科学的記述」としての側面を検討しようと思う。言うまでもなく、科学的記述とは何かという問題は、科学哲学の分野をはじめとして、いまだに探究され続けている、困難な問題である。しかし、本稿では、会話分析が、社会化過程の具体的なデータを分析する一方法として関連性を持つ範囲においてのみ、その科学的記述の特徴を検討するだけで十分である。その基本的特徴とは、以下に示すような態度のことである。

科学者として我々は、我々の対象についての正確な記述を生み出そうと努める。記述をするために我々は、言語を構成する。(あるいは、我々の使用目的のために、言語を適合させる。)我々がすでに持つ言語から出発するのは、粗雑な方法ではあるが、そのときでも、一つの規則は常に心に留めて置かれる。すなわち、我々がどのような対象を取り上げようとも、それは記述可能でなければならない。また、我々が対象として取り上げるものは、それ自身、記述されていないかぎり、我々の記述装置の一部分として考えられることはない⁽¹⁾。

本稿の議論にとって本質的な命題は、この引用の最後の部分である。従来の社会学的探究においては、社会現象を記述する場合、記述対象となっている人々にも研究者にも理解可能な、日常言語を駆使して行われていた。そして、その記述用具たる日常言語それ自体は、あらためて記述の対象となることはなかったのである。したがって、科学的記述に関する、この命題を考慮する限りにおいて、いままでの社会学の、科学としての記述態度は、基本的に考え直される必要があることになる。

パーソンズ (T. Parsons) の行為の準拠枠からも示唆されていることである

が⁽³⁾、社会的行為は、実際の行為と、行為者の知識運用、すなわち言語活動の二つの部分から構成される、と考えられる。そこにおいて、行為者の言語活動は、パーソンズにおいては、行為者を合理的行為に導く、客観的な表現群として考えられている⁽⁴⁾、エスノメソドロジーや会話分析では、厄介な性質を持つ、文脈依存的表現群として捉えられている⁽⁵⁾。いずれの場合でも、そこで問題となるのは、実際の行為と、それを媒介するところの言語活動の関係である。従来の社会学的研究では、その関係をめぐって、いくつかの類型が存在していた。サックスの指摘にならって、ここでは、それらを以下のように分類しようと思う⁽⁶⁾。

(1)常識的パースペクティブ——この態度は、実際の社会的行為を、行動部分と、発話部分に分けて考え、発話部分は、行動部分に注釈を加えている、というふうに認識する態度である。ここでは、ある行為を理解するためには、その行為を構成している行動部分に対する、行為者自身の発話部分を聞くことで解決される。

(2)常識的パースペクティブの「異邦人版」——この態度は、実際の社会的行為の行動部分は観察できるが、その発話部分が理解できない人物の態度である。すなわち、観察の対象としている行為者と、日常言語を共有していない人が、社会的行為を観察する場合に言及している。その場合、その人は、行為者の行動部分に関する、行為者自身の発話を聞いて、それに対応する自分の言語を発見する作業に従事することによって、その行為を理解しようとする。

(3)実際の理論家の態度——この態度は、社会的行為の行動部分も発話部分も理解できる人物が、その両者の関係について、疑問を持つ場合に言及するものである。彼は、行為者が自身の行動部分に対して行う、発話部分による注釈が、一致していないとか、不十分だとか、もっと正確にすべきだとか主張するであろう。あるいは、その発話部分による注釈を認めるには、行動部分がうまく行われていないと主張するかもしれない。いずれにしても、彼は、行為者自身には気付かれないままになっていて、彼自身にしか認識できないと考えられる、行動部分と発話部分との関係の不調和に関心がある。そして彼は、何らか

の方法によるその解決法を、実際に提言するかもしれない。こういった問題関心を持っている人物は、サックスの用語法にならなって「実際の理論 (practical theory)」に携わっている、ということができる。サックスによれば、実際の理論とは、社会的行為が何らかの問題を孕んでおり、その解決として、すでに理解できるその行動部分と発話部分との、関係の調停 (reconciliation of the relation) を含むような問題である、という理解を背景に行われる 問題関心を言うのである。

以上三つの記述態度の諸類型が、程度の差こそあれ、従来の社会学的記述の態度を構成してきたものであると考えてよい。こういった態度が可能であるためには、(a)行為者の駆使する日常言語が理解できること、(b)行為者の行動部分を何らかの言語で表現できること、という二つの条件が必要である⁹⁾。しかし、行為者の駆使する日常言語、および、行動部分を表現する言語が、共に、科学的に記述されていないかぎり、科学的態度においては、それらを記述手段として利用するわけにはいかない。したがって、社会的行為を「科学的に」記述しようとする人物は、その対象たる行為者の行動部分と発話部分に関して、彼自身で設定した記述手段で表現することを試みなければならない。

社会学者たちは、社会生活が部分的に、人々による言語の使用から成り立っていると考えている。ほかの社会生活と同じように、人々が用いる言語は、実際に記述されなければならない一つの対象である。そして、それが記述されたときにのみ、その言語が、我々の記述装置の一部分となるのである¹⁰⁾。

以上が、本稿でいう「科学的記述」としての会話分析の出発点を特徴づけるものである。このような態度は、会話分析が、行為者の言語活動それ自体を、社会学的記述の対象にする視点を提供したことから、あらためて社会学における科学的記述の問題として提起されることになったのである。

3. 行為者の言語活動の社会学的記述

しかし、対象となる行為者の言語をあらためて記述するという視点のみでは、社会学的記述としての会話分析の方法論的特徴づけとしては、必ずしも十分ではない。そこには、社会的行為の有意意味理解の要請という側面が含まれているため、さらに微妙な問題を提起してくるのである。

前節で指摘したように、従来の社会学的研究では、その観察対象の理解は、研究者も対象となっている行為者も、同じように日常言語が理解可能であることを前提にして行われる傾向にあった。しかし、こういった前提は、科学的態度としては、むしろそれを対象化したうえで、あらためて客観的に記述しなければならない問題である。ところが一方で、パーソンズの行為の準拠枠の要請から、社会的行為の理解は、行為者の観点を考慮することが条件である⁹⁹⁾。したがって、社会学者にとって、その記述対象たる社会的行為を有意意味に記述するためには、行為者が、自身の行為を方向づけるために運用する常識的構成概念を理解することが必要である。社会学者は、通常、対象とする行為者とは同じ社会の成員であるから、その行為者の日常言語を理解できるし、その理解力が、行為者の観点からの行為の理解にとって、不可欠なのである。

エスノメソドロジーや会話分析では、日常の行為者が、社会現象を理解可能で説明可能にしていく場合の条件として、日常言語の習得をあげている¹⁰⁰⁾。そういった意味で、その条件を充たす行為者は「成員 (member)」と呼ばれる¹⁰¹⁾。成員は、日常言語を駆使して、その本質的な特性である文脈依存的表現の厄介な性質を巧みに運用しながら、社会現象を説明可能にしていく。また、そうせざるを得ないのである。そして本質的なことは、社会学者もそこから逃れることはできない、という点である。すなわち、「相互行為の参加者たちが従事する諸活動を認識する場合、社会学者は、彼の持つ成員としての知識を利用せざるを得ないのである¹⁰²⁾。」

さて、エスノメソドロジーや会話分析においては、一般に社会的行為は、文

脈依存的表現を駆使した「合理的行為」であると理解され⁹⁹、さらに「行為の合理的特性は、データとしての地位を持つだけである¹⁰⁰」という命題と関連して、この領域の方法論的な態度の独自性が規定されるのである。ここで、行為者の言語活動を次の二つに分けて考えてみよう。

a) 社会学者が記述の対象にしている、行為者どうしの相互行為状況で駆使される、文脈依存的表現の運用の様態。

b) 社会学者が、記述の対象にしている行為者どうしの相互行為状況で駆使される、文脈依存的表現の運用の様態を、彼らと同じ日常言語を駆使して理解しようとしている、社会学者自身の言語活動の様態。

行為の合理的特性が、データとしての地位を持つだけであるから、その一形態である社会学者による社会的行為の理解の様態も、記述手段として例外視されることなく、データとして記述の対象とならなければならないのである。したがって、行為者の言語活動の社会学的記述においては、社会学者による、行為者の言語活動の記述だけでなく、社会学者自身の言語活動も明示的に記述できなければならない。つまり、社会学者は、観察している行為者の言語活動を理解する場合、そこにおける様々の、あるいは当然のこととされている自らの言語運用の様態を、理解手続きとして明示する必要がある。

以上のようなことから、一般に、社会学者が、行為者の言語活動を記述する場合の態度が次のように定式化されることになる。

〔第一段階〕——社会学者は、まず最初に、行為者の言語活動を記述する場合、その記述が、いかに科学的記述を意図していようと、仮にも、行為者の観点を考慮するなら、行為者と共有している日常言語の理解、常識的な知識を利用せざるを得ないことを認める必要がある。そのようにして、社会学者は、行為者の言語活動、すなわち、会話データを記述しようとするのであるが、行為の合理的特性の命題の要請から、さらに、次のような態度を採る必要が生ずる。

〔第二段階〕——「社会学者は、彼の持つ成員の知識に依拠する、という最初の決心をしたあとで、会話がどのようにして認識可能な活動のユニットとして行われるのか、という点を、あらためて問題として (problematic) 設定する。

このことは、社会学者に、一連の会話を意味づける際に、参加者たちと共有しているところの資源 (the resource) を、はっきり明示することを要求する。その過程のすべての段階で、必然的に、社会学者たちは、彼らの社会の成員としての能力 (socialized competence) を利用しつつけるであろう。しかし一方で、それら資源とは何なのか、そして彼は、それをどのように利用するのかを、はっきりと明示しつつけるのである。……つまり、社会学的発見とは、不可避免的に、その社会の内側からの (from within the society) 発見なのである⁴⁰。」

4. 社会学的自己分析と再構成可能性

さて、この手順を詳しく考えてみよう。第一段階は、行為者の言語活動を、彼と同一の社会の成員であるという利点からの、社会学者の社会的能力を利用して、その言語活動を理解しようと決心する段階であった。この手順は、従来の社会諸科学が、暗黙にであれ、明確にであれ行ってきたことである。その意味で、この段階については、とりたてて、理解困難な問題はないと思われる。社会学者として、我々は、研究対象となっている行為者たちと、語りあえるし、理解しあえる、という素朴な見解は否定すべくもないことである。問題は、第二段階にある。第一段階での、そのような素朴な理解を対象化して、社会学者自身が、その理解を可能たらしめている資源を、科学的記述として提出する、という手続きは、具体的には、どのようなものになるのであろうか。

この手続きが具体的に示されているものの一つに、サックスの初期の論文がある⁴¹。彼は、ある子供の発話例を素材にして、まず彼自身がその発話をどのように理解するかを「データ」として提示し、次にその理解過程を客観的に記述することを試みている。

私が、‘The baby cried. The mommy picked it up.’ という発話を聞くと、私が理解する一つのことは、‘baby’を抱き上げる ‘mommy’ は、その赤ん坊の母親である、ということである。これが第一番目の観察である。……さ

て、その母親が、その赤ん坊の母親であると理解するのは、ほかならぬ私である、ということだけではない。むしろ、少なくとも、あなたを含む多くの人々もまた、そのように理解するであろう、ということを私は確信できると思う。これが、第二番目の観察である。私の一つの課題は、このような事実を提供するような、概念装置を構成することである。その概念装置とは、すなわち、この発話例を我々がそう理解するに至るのは、いかにしてなのか、という点を示すものである。

さらに続けよう。我々は、二つの文を聞くであろう。最初の文を S1, 二番目の文を S2 と呼ぼう。最初の文は、O1 という出来事を報告しており、二番目の文は、O2 という出来事を報告している。さて、我々は、S2 が S1 に続いていると理解するので、O2 が O1 に続いていると理解するであろう。これが、第三番目の観察である。同様にして、我々は、O2 が、O1 ゆえに生起したと理解する。すなわち、O2 の生起の説明は、O1 が起こったということである。これが、第四番目の観察である。私は、我々がこのように理解するに至るのは、いかにしてなのか、という点も示す概念装置を必要としている。…ここで、次のことを指摘しておきたい。つまり、これら一連の観察は、社会学的発見として提起されているのではない、という点である。むしろ、社会科学が解決すべき問題のいくつかを提起しているのである⁹⁹⁾。

サックスが、このような一連の観察を、社会学的発見として提起していないことを、わざわざ確認しているのは、これら一連の観察が、客観的に記述されるべき「データ」であると考えているからである。これら一連の観察でもって、社会学的記述が終わるのではない。むしろ、これらの過程自体を記述する概念装置の定式化こそ、社会学的記述の目標なのである。

さて、次は、これら一連の観察過程を記述する概念装置を定式化しなければならない。この段階において、科学的記述としての「概念装置」が社会学的記述として提起される。サックスは、そのために、様々な概念装置を提起している。たとえば、所属分類化装置 (membership categorization device) とか、

カテゴリー運用に関する「一貫性の規則」「経済性の規則」「反復使用の規則」、あるいは「系列規則」といったものである⁹⁹。

サックスのこういった手続きに明確に表れているように、行為者の言語活動の社会学的記述の第二段階では、社会学者が、その言語活動を理解する一連の過程の記述を目的とする、社会学者自身によって案出されるところの、構成概念の定式化が行われる。これは、すでに社会の成員であるところの社会学者が、自らの持つ社会的な理解能力を駆使して、社会的現象を理解する過程を自己分析しているということでもある。このような意味で、この手順に基づいて行われる社会現象の記述過程を「社会学的自己分析」と呼ぶことができるだろう。

しかし、以上のような手続きが、客観的記述であることに、若干の躊躇が残るかもしれない。その躊躇は、社会学者が行う、常識的知識による一連の理解が、一般性を持たないのではないか、という不安に起因するものである。しかし、この不安には、いくつかの点で答えることができる。まず、社会学者が行う、常識的知識による一連の理解が、一通りでないことは明らかである。サックスの例は、非常に単純な発話を素材にしているので、その理解に関しては、ほとんど異論がないようなものである。しかし、より曖昧な発話例に関しては、そのような合意が成立しないことがあるだろうし、むしろ、そういった場合の方が多いと考えられる。このような発話の意味の曖昧性に起因する、理解の多様性は、このような社会学的自己分析で無視されるのではない。逆に、そういった理解の多様性は、それ自身、記述されるべきデータなのである¹⁰⁰。もしも、サックスが行った一連の観察とは異なる観察が可能であるにしても、今度は、そのようにして行われた観察が、サックスのそれと異なるに至る過程を記述する構成概念を探究することになる。

ここで重要なことは、社会学者による理解の「結果」と、その「方法」との区別である。理解の結果の多様性は、社会学的発見の一般性の障害ではない。なぜなら、サックス自身も指摘していたように、それら一連の理解の結果は、一通りに決まろうともそうでなかろうとも、決して社会学的発見ではないから

である。社会学的発見として一般性を持つべきは、そういった多様性を持つかもしれない、理解の結果に至ることを可能たらしめる、社会学者による、概念装置の方だからである。この概念装置は、ある理解の結果に至る方法を記述するものであるし、ある理解の結果に至る方法と同時に、その理解に至らず、別の理解が可能である条件をも記述するものである。仮に、その赤ん坊を抱き上げる人物が、その母親ではない、と理解することが可能な場合でも、母親であると理解する場合を記述する同じ概念装置で記述されることになる。科学的概念図式として厳密に導入された、分類化装置をはじめとする、一連の概念装置は、そういった多様な理解までも構成できるものとして意図されているのである⁹⁹。

以上のような手順を踏んで構成される概念装置が、科学的概念であることを保証しているのは、その概念装置によって、一つ一つのケースに見られる、社会的理解過程や社会的相互行為の再構成可能性 (reproduceability)¹⁰⁰ が満たされるかどうか、という基準で検討する手続きである。ここで再構成可能性を、次のように定義することができる。すなわち、社会の成員が、日常、なにげなく行っている社会的な相互行為を、客観的な表現で提示することを可能にする、有限個の何らかの「方法」として記述可能かどうかという問題設定からなる、科学的記述を試みる関心のことである。再構成可能性は、シミュレーション可能性とも考えられ、日常的な言語活動の「モデル構成」という点に、会話分析の「科学的記述」たる特性があるとも理解できよう¹⁰¹。

5. 会話分析と社会化研究

以上のように、自らが行う社会学的理解をも含めた、行為者の言語活動の客観的な記述を目指す会話分析は、社会的諸活動の微細な側面に関心を集中して探究が行われる。その具体的な記述作業は、それぞれのケースがそれ自体として形式的に記述できるという作業仮説のもとに、テープレコーダーやビデオテープに記録された個々のデータを詳しく分析していくのである。このような研

究によって、言語活動に限らず、日常的に進行する社会的諸活動のどのような側面であっても、それは何らかの「方法」で秩序だっており、そのような秩序は、その「方法」の形式的記述によって、一般化可能なものとして提供できるということがわかってきた。そして「社会学は自然に生起する社会的諸活動に関する一つの観察科学たり得る⁸⁸」という主張を行うことになったのである。

このような主張は、本稿の関心である社会化研究にとって、重要な帰結をもたらす。一つには、社会学的な研究としての社会化研究も、子どもの日常的な活動の自然な観察によって行われ得るということである。観察による社会化研究は、主に心理学の分野で行われてきたのであり、社会学の領域で、一般的に行われてきた方法であるとは、必ずしも言えない。また、たとえそれが行われる場合でも、そこで生起する諸活動の形式的記述を目指すものとして行われることは、ほとんどなかったと言ってよい。さらに、いままでの社会化研究においては、この過程の微細な分析をする以前に、どのような局面が子どもの発達プロセスとして重要なものであるかが、すでに理論的に与えられており、それ以外の現象は、どちらかと言えば研究に値しない、多少とも偶発的に起こっている現象だと見なされがちであった。しかし、我々自身を含めて、子ども達が遭遇する社会的経験は、それぞれに異なる親や環境のもとで、多少とも行き当たりばったりの、狭い範囲に限られたものであるし、日常生活者としての親たちが、理論的に指定された社会化過程を十分に意識して、その筋道にそって子どもを育てているとは必ずしも考えられない。それにもかかわらず、社会の成員として我々は、かなりの程度同じように成長して、大人になっているのである。この事実、理論的に指定される以前に、我々が直観的に想像するような仕方ではない、子どもの社会化過程をめぐる日常的で微細な秩序というものが存在し、それがかなりの程度一般的な「方法」として文化的に配置されているのではないか、ということを示唆しているように思われる。言い換えれば、社会化過程の一般性は、必ずしも統計的なそれとしてだけではなく、子どもが遭遇する一つ一つの社会的諸経験の「方法的」記述可能性として与えられるのではないかということである。したがって、社会化過程を日常的な微細な社会的

活動として捉え、その個々のケースを形式的に記述するという、会話分析の方法論的視角からの社会化研究は、むしろ、ある社会の子どもに提供されている発達経路の文化的配置に、より直接に接近できる方法であると考えられるのである。

もう一つは、会話分析が研究者自身の言語活動を対象化する視点を持っているということは、ある研究者が、何らかの社会的諸活動に、形式的に記述しようとアプローチするその過程そのものが、その社会の文化的な秩序に自らを意識的に社会化しようとする手続きとして考えられるということである。自然観察の結果として得られた具体的ケースに見られる、そのような文化的秩序は、その社会の成員が多少とも偶然に遭遇するものと同じものであるから、それを形式的に記述しようとするということは、その社会に社会化される成員が、そのようなケースを体験する過程を、客観化しようとしていることになる。一つ一つのケースに秩序を発見できるという会話分析の作業仮説は、会話分析という研究そのものの存立基盤であると同時に、それ自体が、社会学者自らを対象とした「社会化過程のモデル構成」の試みであるという位置づけをも可能にするのである。したがって、この視角からの社会化研究においては、研究者自身の、社会化過程に対する認識様式そのものが、記述対象としての重要なサンプルとなる。これは、次のように意味づけてもよいだろう。すなわち、自らが属する社会で行われる社会化過程を、会話分析の手法で探究する研究者は、具体的データに内在する秩序と、社会の成員として持っている自らの社会的認識の様式とを、その形式的記述の試みという場の中で「顕在化」させることによって、究極的には、社会的存在としての自らの基盤を理解し尽くそうとしていることになる。会話分析の手法による社会化研究は、その徹底した「科学化」の方向性ゆえに、対象としての社会化過程と、記述主体として研究者の認識過程を二元的に捉えることを一旦放棄するという逆接的な視点の中に、この現象の「客観的記述」の可能性を見ようとするのである。

このように、会話分析の方法論的側面には、社会化研究の対象、方法、認識枠組みのそれぞれを大きく変化させる視点が含まれている。したがって、会話

分析を、単に質的データ収集の手段として位置づけるのではなく、以上のことを十分に意識した問題設定による社会化研究の蓄積が課題となってくるのである。

注

- (1) Sacks, H., "Sociological Description", *Berkeley Journal of Sociology* 8, 1963, p. 2.
- (2) Parsons, T., *The Structure of Social Action*. (Free Press, 1949), 稲上他訳『社会的行為の構造』第1分冊, 木鐸社, 1976年, 78~79頁。
- (3) Parsons, T., 前掲訳書, 97~98頁。
- (4) Garfinkel, H., *Studies in Ethnomethodology*. (Prentice-Hall, 1967).
- (5) Sacks, H., op. cit.
- (6) Sacks, H., op. cit., p. 6.
- (7) Sacks, H., op. cit., p. 2.
- (8) Parsons, T., 前掲訳書, 81頁。
- (9) Garfinkel, H. & Sacks, H., "On Formal Structure of Practical Actions", in Mckinney, J.C. & Tiryakian, E. (eds.), *Theoretical Sociology: Perspectives and Development*. (Appleton-Century-Crofts, 1970), pp. 337-366.
- (10) Garfinkel, H. & Sacks, H., op. cit.
- (11) Turner, R., "Words, Utterances, and Activities", in Douglas, J.D. (ed.), *Understanding Everyday Life*. (Aldine, 1970), p. 177.
- (12) Garfinkel, H., op. cit.
- (13) Garfinkel, H., op. cit., p. 262-263.
- (14) Turner, R., op. cit., p. 177.
- (15) Sacks, H., "On the Analysability of Stories by Children", in Turner, R. (ed.), *Ethnomethodology*. (Penguin, 1974), chap. 17.
- (16) Sacks, H., "On the Analysability of Stories by Children", op. cit., pp. 216-217.
- (17) Sacks, H., "On the Analysability of Stories by Children", op. cit. を参照。また, Sacks, H., "An Intial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology", in Sudnow, D. (ed.), *Studies in Social Interaction* (Free Press, 1972), pp. 31-74, 430-1. も参照せよ。
- (18) Schegloff, E. A., "On some questions and ambiguities in conversation", in Atkinson, J. M. & Heritage, J. (eds.), *Structure of Social Action*. (Cam-

bridge University Press, 1984), pp.28-52.

- (19) Sacks, H., "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology", op. cit. にその具体例が見られる。
- (20) Sacks, H., "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology", op. cit., p.31.
- (21) ここに、エスノメソドロジーの一部門としての会話分析の独自性が存在すると考えられる。詳しくは、清矢良崇『社会化過程分析に関する理論的実証的研究』筑波大学教育学博士学位論文，昭和62年〔未刊〕，第七章を参照。
- (22) Sacks, H., "Notes on methodology", in Atkinson, J. M. & Heritage, J. (eds.), op. cit., p.21.

——文学部専任講師——